

NO. 32
March '02

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

ジェンダー研究の創造へ

丸 島 令 子

思いがけず3年間もディレクターをしてしまいました。長居をし過ぎたのではないかと危惧します。前任の風呂本先生時代の企画について、運営委員、編集委員また所員全員の先生方のご協力とご支援により、サブ・ディレクターに等しい有能な豊福裕子氏とともにつつがなく毎年の活動をこなすことができない、深謝申しあげます。

当インスティテュートにはここ数年間に、女性学を専門とされる若手の所員の先生方が増え一層活気を帯びてきました。女性学の授業内容も整合性をもって充実され、来年度の後期にはジェンダー論として他大学にも開放される西宮市大学交流センターのカリキュラムの一端を担うことになっています。このような教育面と並行してインスティテュート本来の研究面においては「ジャン研」と名づけられた研究会が2000年5月に発足し、有志の所員が参加され、活発な研究のもと、来年度には著作の刊行という運びになっています。当インスティテュートは物心（励ましと出版助成金）両方の助力を惜しまない方針が確認されています。

当インスティテュートは発足当初からアカデミックな研究に力が注がれ、本年度で16号の発刊となる『女性学評論』は高く評価されます。そして毎回その内容の多様さと視点の新しさには感動を覚えます。一昨年からの研究活動の中に若々しいエネルギーを招来するために、学生懸賞論文公募制度が導入されました。今年で3回目となり、毎年数件の応募はありますが、最優秀賞はここ2年実現していません。学術雑誌の掲載に耐え得るための審査の基準がやはり高いのです。それにもめげず挑戦する学生諸姉の奮闘をこれからも期待して止まないところです。いま一つインスティテュートでは男女所員の先生方のジェンダーフリーともいえる協力的で和やかな活動が見られ、とても誇りとするところです。

さて私自身の専門分野である精神分析的臨床心理学では、gender identity は人間の心の形成という点でいまだ議論が尽くされたわけでもなく、私は今後取り組むべき宿題を持たされたようです。ありがとうございました。皆様の一層のご発展をお祈りいたします。
(女性学インスティテュートディレクター、人間科学部教授)

はじめの一步

正 木 芳 子

私が大学を卒業したのは1987年。同級生たちは、男女雇用均等法が施行された1期生として社会に出てきました。そして、私自身はというと、大学院に進学したため、直接それにはかかわりませんでした。1993年に第1子を出産したときには、育児休業制度が始まったばかりで、神戸女学院で教員としては最初の育児休業取得者となりました。こう振り返ってみると、私が仕事を持ち、子どもを産んだ後も仕事を続けてきたのは、時代の流れにも支えられてきた部分があったのかもしれないと思えます。

しかし、家庭を持ち、子どもを持つと、「女性だから」と言われることが多くなりました。だからこそ反発してきたことも多くあります。

子どもが保育所へ行き始めると、必ずと言っていいほど、行事などのときには「おかあさん、来てください」と言われる保育士さんたちとの感覚の違いにずいぶん悩まされることとなりました。「どうして『おかあさん』に特定されるの？『おとうさん』じゃダメなの？」きつとうるさい親だなあと思われたことでしょう。

その次の驚きは、子どもが小学校に入学したときのこと。保護者欄に私の名前を書いたところ、「どうしておかあさんの名前を書かれたのですか」と問い合わせがありました。「私の扶養家族になっていますので」と答えたのですが、「みなさん、おとうさんがいらっしゃる場所はおとうさんの名前で書かれるので、書き直してもらえませんか」と言われました。今でも納得のいかない不思議なことの一つです。

そして今回、退職を決めたときに、何人かの方から、「子どもさんから手が離れてこれからというときに、どうして？」と聞かれました。これもきっと、私が女性だから聞かれたことなのだろうと思います。確かに、産休、育休と取らせていただき、やっと家庭も落ち着いて、これからというときにはあると思います。この点においては、これまで支えてきてくださった方々に申し訳ない気持ちでいっぱいです。でも、そういうときだからこそ、再度自分を見直して、新しい道を歩んでゆきたいと思うのです。しなやかに、自分らしく。

(文学部専任講師：英語学)

感じることを行動に

藤田 詠子

私のはじめてNYでの映画のようなテロの情景を見たのは、中国で日本語教員の実習中だった。テレビで飛行機がぶつかっていく、あの信じられないような映像がCMの様に何度も放映され、とてつもなく悲しい気持ちになった。その後の報復攻撃開始後に初めてアフガン難民の様子をテレビで見た時、何かしなきゃという衝動にかられた。その映像とは、自分の家や家族を失い食べるものや水も無い生活をしている様子だった。しばらくして、1日に何人もの人が死んでいく様子をテレビで見て、そして2度目の何かしなきゃ衝動にかられた。今までこのような経験をしたことのない私に、何ができるんだろう、何が必要なのだろうと考えてみた。思いついたのが募金だった。

難民に関する情報量もゼロに等しかったので、日本HCR協会(後に女学院募金振り込み先になる)に電話をかけてみた。担当者の方の話は、今早急に現地は資金が必要であること、募金呼びかけをする場合、ポスターや難民に関する資料を提供して頂けるとのことだった。すぐに友達に話してみた。「大学祭の時に、アフガン難民募金の呼びかけしようかなって考えてるんだけど…」すると友達は、ニュースや新聞を見てそれぞれの感じていることを話してくれたり、実際に手伝えるかたちを具体的に話してくれた。私は同時に、「悲惨な状態を知っているのにそれを無視するような人はこの世には存在しない」と感じられたので、とても嬉しかった。すぐにそのことをゼミの担当である平井雅子教授に話してみた。すると先生は、私との話が終わるとすぐに、学長に電話をしてくれたのだ。「なんて行動の早い人なんだろう」と正直驚いた。そして、感じていることがあるなら、それを行動に表そうという意味を込めて、「Show Your Support」をキャッチフレーズにし、チラシ、募金ボックス、ポスターの作成を進めていった。

当日いざチラシを配り出すと、これが思っていた以上に難しい。活動内容と、簡単なアフガン難民の状態を書いたチラシなのだが、余り受け取ってくれない。関心がないのだろうか、それとも面倒臭いのだろうか。しかし、1度チラシを受け取り、設置しているボックスの前を1度通りすぎ、2度目にボックスまで戻ってきて、落ち着かない様子で募金をして下さった方がおられた。嬉しくて泣きそうになった。その時私は初めて募金ボックスにお金を入れることが勇気の要ること

だと実感した。「1人でも多くの人が1日でも長く生き延びてほしい」という私達の思いと共通しているものがあるような気がして、嬉しかった。結果として大学祭の2日間で約6万円もお金を募ることができた。いろいろな人のそれぞれ違ったスタイルの「Support」がその募金には詰まっているような気がして、事後報告ポスターを作りながらとても感動していた。生活する為の緊急の資金を募りながら、長い目で見た時、立場上弱い子供や女性の為の人権保障や教育がこれから本格的に必要なとされるので、その為の資金として大学祭後もこの活動を細々と続けていくことにした。

大学祭後、平井先生を通して先生の同級生でいらっしゃるめぐみ会の方にも、呼びかけをさせて頂けることになり、口座を開いた。活動拠点を何処にしようか、悩んでいた時、Cohen先生のご好意で文学館にあるEnglish Zoneを使わせて頂けることになった。これからの課題は、卒業後後輩にバトンタッチできるよう準備を完了させることと、意見交換できる場をもてるようにしたい。何事も続けることは、大変だと思う。しかし多くの課題を残しているアフガン難民に関して、私は細く長く何らかの形で活動を続けていきたいと思っている。今回の呼びかけ活動を通して、感じたこと、それは自分の感じることを、行動にして移してみようということだった。そうする事によって1人で何処から手をつけたらいいのか途方にくれていた私だったが、友達から始まり、平井先生をはじめ多くの方々と出会い、道が広がっていった。この方々の協力なしでは、今回の呼びかけはできなかったと思う。この場を借りて本当にありがとうございましたと言いたい。そして、これからも、末永くよろしくお願いします。

(文学部英文学科4回生)

■郵便振替 00950-0-59267

口座名：神戸女学院大アフガン難民募金



左から、深田志真さん、筆者、一瀬奈緒さん、榎戸悠佳さん、小林明子さん、阪田直子さん(大学祭にて：中庭)

連続セミナー「ジェンダーと家族」を担当して

【第1回：2001年6月1日】……………飯田祐子

●「家族の物語」

今回のセミナーでは、「家族の物語」と題して、とくに小説における「母」の描かれ方を問題にしながら、家族像の変化について話してみた。大きな流れをまとめれば、「母」の理想像と現実のずれが母の側から語られる時代から、現実の母と求める「母」のずれを娘が語る時代へ、さらに、「母」という類型が、女性に非常に深い葛藤をひきおこしていることが語られる時代へと展開してきた。こうした展開は、規範的な「母」像の批判的読み替えや、また家族のあり方そのものの多様化が、進んできたことを示している。現在では、シングルとしての生き方と、家族性の関わりが問題になってきている。「母」も「家族」も「シングル」も、それぞれに時代の変化とともに、その意味を変えてきている。いただいた感想では、やはり、そうした変化を感じておられる方が多かったし、これからをどのように生きていくのか、それぞれがそれぞれに、設計することになるという点についても共感してもらえたと思う。私自身、自分のこの先はよく見えておらず、こうまで不確かだということに驚きながら暮らしてもいる。自立することと、家族あるいは家族的な繋がりを持つということは、つねに反するわけでも、またつねに重なるわけでもない。それぞれにそれぞれだということ、不確かさを、引き受けることが出発点となると思っている。

(文学部助教授：日本文学)

【第2回：2001年6月8日】……………真栄平房昭

●「近世の裁判記録にみる男と女」

今回のセミナーでは、社会史の視点から男と女の訴訟・裁判記録を読み解き、夫婦ゲンカをめぐる歴史像の一端に焦点をあてることにした。

「結婚もマカロニも、うまいのは熱いうちだけ」と、イタリアのことわざにも言うように、どんなに仲の良い夫婦でも、長い人生で一度ならず意見の食い違いから口論や夫婦ゲンカを体験する。紛争の火種がさらに燃え広がると、夫婦間の暴力、ドメスティック・バイオレンス(DV)を引き起こす例などもある。

夫婦がお互いの個性を尊重しあい、協同して家庭を営むことを理想とする近代的な家庭観が登場したのは、日本では明治20年代以降のことである。夫婦の人格的対等、家族の「相思相愛」「和楽団契」を理想とする家庭像をもっとも真摯に追求したのは、クリスチャ

ンであった。こうした理想的な近代家庭観が浸透した背景として西洋思想とキリスト教の深い影響は見逃せない。とはいえ、理想と現実の間にはギャップもある。実際、キリスト教徒の多い欧米諸国でも男女間の紛争や離婚、家族崩壊などの件数はむしろ増える傾向にあり、家族や人間関係をめぐる悩みの種は尽きないのが現実である。

セミナー終了後、受講者の皆さんから活発な質疑応答があり、質問用紙でもさまざまな意見を頂戴した。社会史の視点から身近な夫婦ゲンカなどを取り上げた今回の講義テーマが、ジェンダー論を深く考えるきっかけの1つとなれば、幸いである。昨今、ジェンダー論やDV問題をめぐる議論が日本でもさかんだが、欧米理論の導入にとどまらず、日本社会の底部に根ざした夫婦間暴力や、家族の歴史社会学についての学問的検証がさらに必要であろう。そのことを改めて感じたセミナーであった。

(文学部教授：歴史学)

【第4回：2001年6月22日】……………丸島令子

●「家族の成立とジェンダー」

今年度は学外の参加者にとって、実生活とも関連が深く分かりやすいという趣旨で選ばれたセミナーのテーマであったのですが、私はあえて家族が成立したセクシュアリティの起源とジェンダーとの関係に関心を持ってもらって、人間の家族とは何か、というような根源的な問いを参加者と共に議論したり、女と男、未来家族について意見交換ができることを期待しました。そのために準備した資料は、生物社会学における人間のオス・メスの雌雄性の進化と家族成立に関するものも入っていて、いささか多量で、短い時間で基礎的な情報にさっと触れ、その上いろいろな課題も検討するなど、もともと無理であることをやろうとした愚を反省させられました。

そうした私の無力感にもかかわらず、セミナーの授業時間中に「人間の家族は将来には大変化を遂げる、今はその変わり目にあるのでしょうか」のような鋭い質疑もあつたりして、洞察力の秀でた方もおられて、大きな刺激になり有難かったです。また感想文が寄せられたのを拝見すると、男性の参加者の一人が「なかなか面白かった」と、時間中全くそのような素振りは微塵も見せておられなかったようでしたのに、感想をお書きくださって驚かされました。一方では「このトピックスを第一目の時間にすべきだった」というご意見や批判もあり、参考になりました。こちら講師側も山ほど伝えたいことがあり、参加者側ももっと熟知

して質疑をしたいという、互いの欲求不満の感触が残ったような気がしましたので、読みやすい参考文献をいくつか紹介して許していただくことにしました。

(人間科学部教授：臨床心理学)

※なお、第3回(2001年6月15日)は渡辺和恵氏(きづがわ共同法律事務所：弁護士)に「夫などの暴力と女性の自立」をテーマにご担当いただいた。講義内容は以下の通り。「私はく女のかけ込みシェルター 生野学園」の運営に参画しています。女性に対する暴力、特に家庭内の夫等の暴力は女性の人生自身を破壊します。女性が自立の力をつけ、これをサポートする必要性が認識され、共感の輪が広がる中で、国連レベルでこの問題解決の国家責任(社会的課題)がとりあげられるようになりました。夫の暴力の実態・女性と子どもの救済の実情・夫の暴力の原因とその克服・DV法の動きなどを紹介します。」

***** 頼藤和寛先生のご逝去を悼んで *****

2001年4月8日にご逝去された本学人間科学部教授で女性学インスティテュート所員でもいらした頼藤和寛先生を偲び、4月18日より5月末日まで当インスティテュート前に「追悼コーナー」を設けた。コーナーには先生のご著書やご論文掲載誌等を展示した他、先生がご逝去の直前に『文藝春秋(2001年5月号)』に発表された手記「精神科医がガンになって」のコピー等を用意して自由にお取りいただいた。

なお、当インスティテュートでは「ニュースレター」No.31(2001年10月発行)で先生を偲ぶ特集を組み、2002年3月発行の『女性学評論』第16号には先生の最後の著作『わたし、ガンです ある精神科医の耐病記』(文藝春秋)の書評を掲載している。多くの方がお読みくださることを期待いたします。



『女と男』

男らしさの呪縛

金 沢 謙太郎

私がまだ小学生だったころ。ある朝、父と母の夫婦喧嘩で目が覚めた。「あー、まったく大人げないなあー」とつぶやきながら、ランドセルを肩にひっかけ家を出た。しかし、授業中もそのことが頭から離れず、気がつくといつにも家にまで走っていた。家にはいつもいるはずの母の姿はなく、代わりに次のようなメモが残されていた。「謙太郎へ。男らしく生きていってください。母より」。以来、私は「男らしさ」の意味もよくわからぬまま、その呪縛に苦しむこととなった。

卑近な例を2つ。先日、当インスティテュート所員のある先生から「有志でスキーに行きましょう」とのお誘いがあった。その時期はたまたま先約があったので、「残念ですが」とお断り申し上げた。しかし、もし予定が入っていなかったら、どうだろうか。「行きます!」と即答できただろうか。信州出身でありながら実は私はスキーが苦手なのだ。男がへっぴり腰でノロノロやっていると周りから冷たい視線を浴びることは必至だ。女性であれば男性に、「初めてなんですか」といって教えてもらえるだろうが。

また、3年生のゼミでこんなことがあった。今度、電車もバスもないところへ遠出の見学に行く予定だ。私が「タクシーで行くしかないな」といかけたとき、「先生、免許もってます?」とゼミ生の一人が質問してきた。「ああ、もってるよ」「だったら、レンタカーとかあ?」「えっ。だれが運転するの?」「やっぱ、男だから先生に決まっているでしょ」「いや、あのおー、実はペーパー・ドライバーで、今では坂道発進もできない…」と私はシドロモドロだった。この正直な告白に学生諸君は一様にノー・リアクションだった。

というわけで、私は「男らしくあらねばっ」と思いながらも「男の嗜みが身についていない」という現実とのギャップに人知れず思い悩むのである。冒頭の話の続きだが、放課後トボトボと帰宅した。そこには驚いたことに母がいた。聞くと、家出覚悟だったが途中で思い直したという。幸い現在まで両親はそれなりに仲良くやっている。その母にこのエッセイを書くにあたり、あのメモのことを訊ねてみた。「悪かったね、でもまったく記憶にないねえ」といわれてしまった。

(人間科学部専任講師：環境社会学)

『女と男』

ある対話

高橋 雅人

以下は、友人 (F) と私 (M) との会話である。

F. 相変わらず暗い顔をしているわね。何かあったの。

M. 何かあったのなら、相変わらずではないはずだけど。

F. 「いつも以上に」って言わなかったのは私の優しさなのよ。で？

M. 実は「女と男」と題するエッセイに何を書いたらいいのか頭を抱えているんだ。

F. 普段フェミニズムについて考えていない罰が当たったわけね。でも何かは思いついたんでしょ？

M. 少しは。例えば、セクシストと思われているアリストテレスの中にも女性の自由を認めていないポリスを批判している箇所があるとか。

F. 砂漠でダイヤを見つけても砂漠は砂漠よ。

M. ならやっぱりプラトンかな。女性にも男性と同じ教育を授けるべきだと主張しているからね。

F. それもイマイチね。「女と男」っていうコラムなんだから、せめて女性の著作について語らなきゃ。

M. そういう意味だったのか。俺はてっきり女学院のアルファベット趣味のせいで「女」が先なのかと書いていたけど。

F. それ、つまらないわよ。そんなことよりヌスバウムは？ 彼女なら古典主義者のあなたも少しは読んでるでしょ。そのヌスバウムのこれ (Nussbaum, Martha C., *Sex and Social Justice*, Oxford, 1999.) はお勧め。倫理学者は必読だけど。単に「もっと正義を！」って叫んだ本ではなくて、性差別と感情の問題とか、そもそもなぜ性差が差別を生むのか、っていう根本的な問題も扱っているわ。それにこの本の一部はあの高名な古典学者のケネス・ドーヴァーとの書簡のやりとりから生じてきたもので、だからこ彼に捧げられているし。

M. それはすごい！ もう少し詳しく内容を教えてくれないかな。…

残念ながらここで夢の記憶がなくなっている。その後の話の展開も友人とは誰なのかも不明なままである。

考えてもわからないので、勧められた本を読むことにする。
(文学部助教授:哲学)

2001年度年間活動報告

I 講演会・セミナー等

連続セミナー「ジェンダーと家族」(定員30名)

会場：神戸女学院大学アフォレスト館202教室
〈第1回〉2001年6月1日(金)

「家族の物語」

講師：飯田祐子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：日本文学)

〈第2回〉2001年6月8日(金)

「近世の裁判記録にみる男と女」

講師：真栄平房昭氏

(神戸女学院大学文学部教授：歴史学)

〈第3回〉2001年6月15日(金)

「夫などの暴力と女性の自立」

講師：渡辺和恵氏

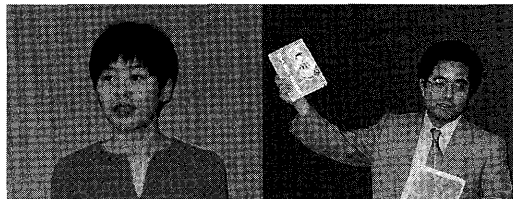
(きづがわ共同法律事務所：弁護士)

〈第4回〉2001年6月22日(金)

「家族の成立とジェンダー」

講師：丸島令子氏(神戸女学院大学人間科学部教授：臨床心理学)

[受講者数：67名 平均出席者数：46名]



飯田祐子氏

真栄平房昭氏



渡辺和恵氏

丸島令子氏

特別講演会 2001年7月6日(金)

「これからの性と生」

会場：神戸女学院講堂

講師：深江誠子氏

(平安女学院大学助教授
兼女性センター長；経済学・女性学・社会学)



[出席者：170名]

学外講演会

会場：宝塚市立女性センター・エル（宝塚市）

〈第1回〉2001年10月24日（水）

「食品環境と健康について

ー考えながら食べると健康になれる」

講師：塩見尚史氏（神戸女学院大学人間科学部助教
授：遺伝子工学・人間環境工学）

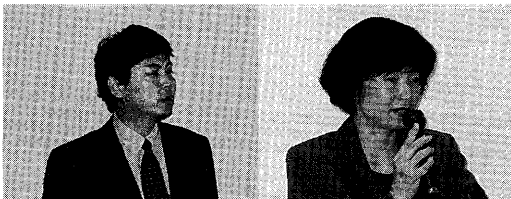
〈第2回〉2001年10月31日（水）

「ルネサンス期イタリアの女性たち」

講師：高橋友子氏

（神戸女学院大学文学部助教授：西洋史）

〔出席者：第1回 25名／第2回 25名〕



塩見尚史氏

高橋友子氏

特別講演会 2001年11月16日（金）

「西洋音楽史のなかの
女性たち」

会場：神戸女学院講堂

講師：津上智実氏

（神戸女学院大学音楽
学部教授：音楽学）



〔出席者：145名〕

II 研究助成

「フェミニズム美術史の問題点」

浜下昌宏 [文学部・教授]

III 学会等出張補助（国内・海外）

2001年度は申請なし。

IV 授業（科目名：Cu234「女性学」）

（1）（2）コースとして前期・後期とも開講された。

V 学生懸賞論文（「女性学インスティテュート賞」）

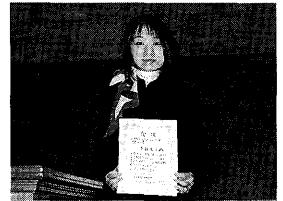
2001年度（第3回）の選考結果は以下の通り。

〈優秀賞〉（2編）：賞金2万円（賞状）

古田敦子氏（神戸女学院大学文学部総合文化学科
2001年3月卒業）

芳野祥子氏（神戸女学院大学文学部総合文化学科
2001年3月卒業）

表彰は2001年10月
19日（金）神戸女学
院講堂において学
院の各種記念賞授
与式とあわせて行
われた。



古田敦子さん（芳野祥子さんはご欠席）

VI 出版物

『女性学評論』第16号

特集：楽しく老いる（2002年3月発行）

「ニュースレター」No.31

〈頼藤和寛先生追悼号〉（2001年10月発行）

「ニュースレター」No.32（2002年3月発行）

—— ディレクター就任 ——

女性学インスティテュートディレクターに上西妙子
文学部教授が就任。任期は2002年4月1日より2004年
3月31日までの2年である。

—— 2002年度（第4回）学生懸賞論文募集 ——

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象
は本学学生（学部生・大学院生）及び2001年度の本学
卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタ
ディーズに関連する領域の論文。最優秀賞論文（1編）
には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文（2編）には各
2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論
文については『女性学評論』第17号（2003年3月発行
予定）に全文が掲載される。締切は2002年7月24日。
選考結果の発表及び表彰は2002年10月中旬の予定。詳
細は当インスティテュートまで。

※ 図書の間覧・貸出希望者は、図書館本館1階
T-14-13室まで。（*帯出・返却の手続きは
T-14室で行ってください。）

2001年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、小松秀雄、丸島令子（委員長）、三浦欽也、
難波江和英（ABC順） 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545

E-mail: gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/